様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３６００１３

研究課題名（和文）トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係：エヴェンキ人のローカルナレッジの再評価

研究課題名（英文）Sustainable Relationship between Reindeer Pasturage and Nature Protection : Reevaluation of Evenks Local Knowledge

研究代表者
思　沁夫（SI, QIN FU）

大阪大学・グローバルイニシアティブセンター・特任准教授（常勤）

研究者番号：４０４５２４４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は1年間の研究期間延長を除き、ほぼ計画通りに実行、終了した。
本研究の主な成果は２つある。①エヴェンキ語による人類学的調査を通じた、エヴェンキ人のトナカイ放牧に関するローカルナレッジを再構築した。②エヴェンキ人の自然理解に基づくトナカイ放牧実践の理解を通じ、彼らが持続的な生存基盤を構築してきたのか再評価した。本研究結果をロシア語、中国語、エヴェンキ語でまとめ、出版することができたことは、研究計画以上の成果として挙げられる。さらに、これまでで研究代表者は、中国エヴェンキ自治旗旗長賞(重要貢献賞)を受賞したほか、エヴェンキ語による研究手法の開発においてロシア北方少数民族協会から表彰された。

研究成果の概要（英文）：This research project has been completed as planed except one year extension of study duration.
There are two main research results: reestablishment of local knowledge on reindeer pasturage among the Evenks through research in an anthropological approach by using local language and reevaluation of the way of establishment of the realm in which the Evenks exist through understanding reindeer pasturage habit based on their religious nature understanding.This research summarized in three languages: Russian, Chinese and Evenks, which is the result with more than of plan. Even apart from this, the principal researcher won the China Evenk Autonomous Banner leader prize (Excellent contribution) and received recognition from the association of Russian Northern Ethnic Minorities for research approach development in Evenks language.

研究分野：生態人類学

キーワード：エヴェンキ人　ローカルナレッジ　トナカイ放牧　中央シベリア高原　民族誌の再構築　社会主義民族学　生態環境　複合関係

１．研究開始当初の背景

中央シベリア高原は、開発と環境破壊により急速に変化している。前プーチン政権は、エネルギー開発を経済発展の中心にかかげ、同地域の石油、天然ガス、重金属、鉱物資源の採掘を推進し、木材切り出しのためにタイガを伐採した。その結果、同地域で自然利用をしながらトナカイ放牧を営むエヴェンキ人は、「自然か？生存か？」という問題を突きつけられることとなった。すなわち、自然を保護するためにその利用を制限するのか、あるいは生きるためには自然利用（破壊）はやむをえないのか、という選択肢である。また、狩猟採集を行う彼らに対しては、「自然を破壊する人びと」との見方が強められ、社会的な圧力がかけられている。

しかし実は、今日議論の対象となっているエヴェンキ人のトナカイ放牧と自然利用の知識は、帝政ロシア時代以降に実施された調査にもとづいて、ロシア語の文献のなかで蓄積されてきたものである。今求められているのは、こうしたロシア語によって構築されてきた知識を批判的に検討し、あらためてエヴェンキ人のトナカイ放牧に関するローカルノレッジを再構築し、彼らがどのように持続可能な生存基盤を築いてきたのかを明らかにすることであろう。

たとえば帝政ロシア時代のエヴェンキ人の研究は、当時の植民地主義の時代背景を反映し、トナカイ放牧や狩猟採集の後進性を指摘した。そうした傾向は、社会主義時代の調査研究にも引き継がれた。加えて社会主義時代には、共産党の政治イデオロギーを反映し、トナカイ放牧とむすびついたエヴェンキ人の信仰に対しては、低い評価が与えられた。また、エヴェンキ語の豊かな自然利用に関する語彙は、ロシア語に翻訳されるなかで省略・置換された。例えば、この時代を反映した『エヴェンキ』(ワシリエフィチ 1969) は、すぐれた民族誌としてエヴェンキ人のあいだでも教科書的に学ばれてきた文献であるが、同書は歴史発展論にもとづいており、エヴェンキ人の生業を原始社会として位置づけていた。一方、ポスト社会主義時代の人類学的調査も政治イデオロギーの影響を受けている点では大きく変わりはなく、そのほとんどがロシア語で行われており、エヴェンキ語による調査は少ない（例　バトバジェル 2004)。

申請者は、1996 年から中国内モンゴル自治区でトナカイ放牧を営むエヴェンキ人の間で人類学的な調査を行い、修士論文と博士論文を執筆した。その後、2005 年から中央シベリア高原のエヴェンキ人のあいだで、のべ 1 年間の人類学的調査を行い、多数の論文を発表している。習得したエヴェンキ語で調査を行い、ロシア語の文献とつきあわせる作業を通じ、いかにロシア語の文献がエヴェンキ語の豊かな自然理解の語彙を見落としてきたこと、に気づくようになった。環境破壊が問題視され、自然保全とトナカイ放牧との両立のむずかしさが指摘されている今日だからこそ、豊かな自然利用を蓄積してきたエヴェンキ語世界のローカルノレッジに注目する意義があると考えた。

２．研究の目的

中央シベリア高原のエヴェンキ人は、市場化の流れのなかで、どのように自然を保全しながらトナカイ放牧を継続できるのか、という課題に直面している。これまで、エヴェンキ人のトナカイ放牧に関する知識は、帝政ロシア時代以降、ロシア語に翻訳されて蓄積されてきた。これに対し、本研究では、エヴェンキ人のトナカイ放牧に関するローカルノレッジを、エヴェンキ語による人類学的調査によって再構築する。エヴェンキ人の内在的な自然理解にもとづくトナカイ放牧の実践を理解することにより、彼らがどのように持続可能な生存基盤を築いてきたのかを再評価する。生活の画一化を迫る市場化の流れのなかで、ローカルノレッジの多様性を明らかにすることにより、トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係について新たな提言が期待される。

３．研究の方法

I. 本研究では、3 つの研究テーマを次の方法で調査する。

テーマ 1.　トナカイの分類・利用方法（トナカイと人間に関するローカルノレッジ）

1)　フィールド調査

エヴェンキ人のトナカイの分類・利用方法を理解する方法として、彼らとともに絵を描く作業を行う。申請者はこれまでにも共に絵を書く作業を通じ、彼らの生活形態の理解につとめてきたが、この方法が、写真や文章では表現しにくい彼らの内在的理解を引き出すことに有効であることを確認している。

2)　ロシア語文献の収集とその批判的検討

エヴェンキ人のトナカイ分類・利用方法を記したロシア語の文献を収集し、フィールドワークで収集したデータとつきあわせる。それにより、フィールドワークのデータが地域的なものなのか、地域をこえるものなのかを検証する。また、ロシア語の文献では見落とされているトナカイの分類・利用方法を指摘する。

テーマ 2. トナカイの放牧地、エサの多様性（トナカイと自然に関するローカルノレッジ）

1)　フィールド調査

季節ごとにエヴェンキ人のトナカイ放牧に同行し、参与観察を行う。トナカイのエサは、季節によって異なる植生、水環境、および標高差によって選別される。例えば、繁殖期がはじまる 9 月ごろにはキノコ類が好まれる。秋にはロシア政府によって狩猟が解禁されるため、トナカイ放牧と狩猟とのバランスをとりながら、放牧地が選ばれる。このよう

な細かい放牧地とエサの多様性のローカルノレッジについて聞き取り調査を行う。
2) ロシア語文献の収集とその批判的検討
エヴェンキ人のトナカイ放牧やエサに関するロシア語の文献では、それらが自然環境によって規定されてきた面が強調されてきた。これに対し、申請者はフィールド調査によるデータにもとづき、トナカイ放牧地やエサが自然環境とエヴェンキ人、トナカイの 3 者の相互環境によって選ばれていることを示すことができるという仮説を立てている。
テーマ 3. トナカイとエヴェンキ人の精神世界の関係性（トナカイの信仰に関するローカルノレッジ）
1) フィールド調査
高齢者のあいだに残されている口頭伝承や神話について聞き取り調査を行う。トナカイにまつわるシャーマニズムや儀礼を写真や動画で記録する。とりわけポスト社会主義の時代に復活しているシャーマニズムに注目する。トナカイを長距離移動させるときにみられる様ざまな慣習も記録する。
2) ロシア語文献の収集とその批判的検討
これまでのロシア語の文献においては、シャーマニズムは原始宗教と位置づけられてきた。これに対し申請者は、フィールドワークにもとづいて、シャーマニズムとローカルノレッジが密接な関係があるという視点から、これらの文献の批判的検討を行う。
II. 上記の調査にもとづき、本研究では、3) トナカイ放牧と自然保全の持続的な関係について提言を行う。
1. 狩猟トナカイ管理委員会（政府系組織）への提言
ブリヤード共和国には、狩猟とトナカイの放牧を発展させる目的で設立された狩猟トナカイ管理委員会がある。しかし、同委員会は実質的には狩猟とトナカイの管理を行うことに、その機能をとどめているのが現状である。これに対し、本研究では、同委員会への報告とワークショップ開催を通じて、トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係についての議論と提言を行う。
2. ナタリア基金との連携
ナタリア基金は、エヴェンキ人の伝統文化の継承と子どもの教育を目的に、エヴェンキ人によって組織された基金である（ロシア連邦に登録済）。申請者は、2011 年度から、同ファンドと協力し、エヴェンキ人のローカルノレッジの再構築に貢献している。本調査の結果を生かし、どのようにトナカイ放牧の伝統と自然が共生できるかについて提言し、ウェブサイトを通じて発信する。

４．研究成果

〈2013 年度〉
エヴェンキ研究に関する文献を大量に入手し、環境保全や地域の持続性の観点、また、トナカイ飼育、狩猟と自然環境の文化、信仰的利用に分け、再検討を行うとともに、研究文献の翻訳および出版を進めた。
エヴェンキ文化センターのホームページに「エヴェンキ人の失った文化と生活」を紹介した。日本やほかの地域との事例を比較するため、東北大学の研究者等にインタビューを行った。
〈2014 年度〉
中国語、ロシア語、英語、日本語の多言語で図書出版、翻訳を進め、いくつかの国際会議でその成果を公表し、エヴェンキ語およびロシア語のホームページを開設し、研究内容や成果を発信した。調査地で収集したデータを分析し、大阪大学大学院生対象の開講科目「環境問題への回路Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」の教材として研究成果を一部活用した。課題研究活動の業績が認められた結果、サンクトペテルブルク大学の特任研究者に選任されたほか、中国エヴェンキ研究会の名誉会長に選出された。
ローカルナレッジに関する理論的研究、現地調査に基づく実証的研究を推進、様々な形でローカルナレッジを再評価した結果、地域文化保護および継承や普及活動に成果が見られることとなった。
〈2015 年度〉
現地調査および現地での資料収集、現地研究者との協力関係が順調に進み、これまでの文献および現地調査で入手したデータの分析を進め、論文執筆、図書出版、社会発信、教育活動を行った。
〈2016 年度〉
補助事業期間に収集した資料を分析し、学術論文、書籍の執筆を行った。ブリヤード共和国のエヴェンキ文化センターと連携し、エヴェンキ語で発信した研究成果はエヴェンキ伝統文化の保全に貢献した。モスクワ大学で国際会議に参加し、研究成果を発表した。大阪大学や大阪府および京都府内の高校で研究成果を講演し、環境教育に活かした。
シベリア地域におけるエヴェンキ語による人類学的研究手法はロシア、中国、ドイツなどにおいて高い評価を得た。また、言語、生態人類学や地域史によるエヴェンキ人のトナカイ放牧に関する複合的研究アプローチによってトナカイ研究の新しい可能性を示すことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　8 件）

① 思沁夫「スターリンに殺されなかった研究者とエヴェンキ研究」『エヴェンキ研究』査読有、25　2014　pp. 4－26
② 思沁夫「サンクトペテルブルクのエヴェンキ夫人」『エヴェンキ研究』査読有、35 2016, pp. 1-36
③ 思沁夫「アムール・エヴェンキ人の生業について」『エヴェンキ研究』査読有、35 2016,　pp. 37-58

④ 思沁夫「人類学への誘い、人類学からの旅立ち」『社会人類学年報』査読有、VOL42 2016, pp. 105-121
⑤ 思沁夫「サンクトペテルブルクのエヴェンキン人、ソ連時代の民族学者 G.M.ワシリイエウィジとエヴェンキ人」『エヴェンキ研究』査読有、VOL33 2016, pp. 1-26
⑥ 思沁夫「「三少民族」の文化継承－文化継承と現代教育を結ぶための方法を探る」『エヴェンキ研究』査読有、VOL33 2016, pp. 70-79
⑦ 思沁夫「「学際的」研究とは」『OUFC ブックレット』査読有、VOL8 2016, pp. 125-135
⑧ 思沁夫・侯儒「赫哲族、 鄂温克族、鄂伦春族に関する現地調査報告」東北芸術工科大学東北文化研究センター編『環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究　平成 24 年度～平成 28 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業　研究成果報告書』東北芸術工科大学東北文化研究センター、pp.311-329.

〔学会発表〕(計　9 件)
① 思沁夫「エヴェンキ人の普遍的と地域的の比較」世界トナカイ研究会国際シンポジウム、2013 年 9 月 21－23 日、中国
② 思沁夫「IT 技術を活用し、エヴェンキ文化を保存する試み」内モンゴル自治区エヴェンキ研究会『エヴェンキ物質文化保存方法に関する国際会議』2014 年 9 月 1－2 日、中国内モンゴル自治区
③ 思沁夫「「狩猟民とは？」：イメージに支配され、語られてきたエヴェンキ人の近代史からの問い」『北方少数民族の社会変化とアイデンティティ再構築に関する国際会議』2014 年 9 月 3－4 日、中国北京中央民族大学
④ 思沁夫「シャーマンの服博物館である」ものが語る歴史国際シンポジウム、2015 年 9 月 22 日、中国内モンゴル大学
⑤ 思沁夫「なぜ先住民は環境にやさしいのか」北京大学人類学研究科『外国著名人による連続セミナー』2015 年 9 月 24 日、中国北京大学
⑥ 思沁夫「伝統保全について」中国食品安全学会、2015 年 9 月 25 日、中国農業大学
⑦ 思沁夫「エヴェンキ研究 20 年を考える」中国エヴェンキ研究会総会、2015 年 8 月 18 日、中国内モンゴル自治区
⑧ 思沁夫「社会主義時代のエヴェンキ研究」ロシア連邦民族学会、2017 年 3 月 24－25 日、ロシア　モスクワ大学
⑨ 思沁夫「少数民族の文化継承の課題」中国北方少数民族研究会、2017 年 3 月 28－29 日、中国人民大学

〔図書〕(計　9 件)
① 思沁夫『エヴェンキ人』2015、総ページ数 350、北京大学出版社
② 思沁夫、「内モンゴルに生きたダフー人、エヴェンキ人女性たち」『女たちの満州』2015、pp.279-301、大阪大学出版会
③ 思沁夫『東アジア「生命健康圏」構築に向けて一大気汚染と健康問題を考える日中国際会議の記録』2015、pp. 3－29、235－236、OUFC
④ 思沁夫「From Nomads to settlers:A History of the Aoluguya Evenki (1965-1999)」『Reclaiming the Forest The Evenki Reindeer Herders of Aoluguya』2014、pp. 21-45、Berghahn
⑤ 思沁夫『リスク社会－発展・共識・危機』2014、pp. 7－38, pp. 179－190、OUFC
⑥ 思沁夫『エヴェンキの近代化について』2015、総ページ数 123、ブラグウィシンキー国立大学科学アカデミー委員会
⑦ 思沁夫『エヴェンキ研究 2016 年 1 号』2016、総ページ数 100、エヴェンキ研究会
⑧ 思沁夫「フィールドとしての「中国」と「モンゴル」」『「共生」する瞬間』2017、pp. 33－51、大阪大学環イノベーションデザインセンター
⑨ 思沁夫『エヴェンキ人のトナカイに関する文化大辞典』2017、総ページ数 500、内モンゴル文化出版社

６．研究組織
(1)研究代表者
思沁夫 (Si,Qinfu)
大阪大学・グローバルイニシアティブ・センター・特任准教授
研究者番号：４０４５２４４５